

## 日本語に於ける存在の理解 (二)

和 辻 哲 郎

### 三

日本語がその純粹な形に於ては學的概念の表示として用ゐられること少なく、しかもそれが日本語の文法的構造の特質とも一致するとは云つても、それは日本語に於て表現せらるゝ體驗が學的概念として理論的に純化發展させられ得べきものを含まないといふことを示すのではなく、たゞ事實上日本語が藝術的方向に於て著しく發展させられながら理論的方向に於ける發展の可能性をたゞ可能性としてのみ内に藏してゐたといふことを示すに過ぎない。即ち日本語がかく「あつた」といふことはかく「あり得る」ことを没し去るものではない。たとひいかなる過去を背負つてゐるにしても、日本語は我々自身が現に日々の生活に於て使用してゐるものである。従つてそれは既に出來上つた「もの」として我々の前にあるのではなく、我々自身の具體的な不斷なる自己解釋の過程として、我々自身がそれに於て自己の理解性を分枝

し我々相互の間に理解を分ち合ふところのその我々自身の有り方を外にあらはした有りさまとして、あるのである。だからそれは歴史的な一定の性格を持つたものとして、日常的通俗的な用法に於て「すでにある」と共に、またその本來あるべきものになり得るものである。かゝる可能性の視點のもとにのみ我々は、「すでにある」日本語がたゞ個性表現の方向に於てのみ示してある體験の豊かさを、同時にまた理論的な方向にも純化發展させられ得べき體験の豊かさとして理解し得るに至るであらう。しかし我々は可能性の視點のもとにたゞ日本語を「眺める」といふことは出来ない。日本語は眺められるものではなくして我々自身の有り方である。だから可能性の視點のもとに日本語を問題とするといふことは、我々自身が日本語としてすでにある有り方を背負ひつゝ日本語としてまさにあるべき有り方になることでなくてはならぬ。云ひかへれば集團的歴史的體験の表現過程としての日本語に於て理論的に純化發展させられ得べきことを、自ら純化發展させて見なくてはならぬ。それは純粹なる日本語の意味を頼りとして（即ち言語の意味に存せざる概念内容を他より持ち込むことなく）自ら問ひ自ら思索することに外ならない。

我々はこの思索を直ちに哲學の根本問題に結びつける。さうしてそれを日本語

によつて問うて見る。「あるといふことはどういふことであるか。」——もとよりこの問ひが哲學の根本問題であるか否かに就ては論議が起り得るであらう。がその場合にはこの問題がギリシアの哲學に於て中心問題とされたこと、或はヘーゲルの論理學に偉大な形で現はれてゐること、等の二三の事例を以て満足してもよい。或は「あるといふことが哲學の眞正な唯一の問題である」といふ問題の設定を、最後に立證され得るものとして豫め前提して置くのでもよい。——とにかく我々は問うて見る、「あるといふことはどういふことであるか。」

これは極めて平易な、日常的な日本語の問ひである。しかも我々はこの問ひを形作る日本語自身がすでに重大な四つの問題を含んでゐることを見出す。第一は「こと」である。何故に我々はこの問ひを「あるといふもの」は……として問ふことが出来ないのか。「こと」を問ふのは何故であるか。總じて「こと」と「もの」とは如何なる差別を持つか。第二に「いふこと」である。何故にこの根本的な問ひが「いふこと」を問ふて「すること」を問はないのであるか。「いふこと」と「すること」は如何なる差別を持つか。第三はこの「いふこと」を何人がいふかである。日本語は動詞自身に於て人稱の別を示さない。「いふのはわれ」であるか、「なんぢ」であるか、「ひと」であるか。もし

それが文章の意味から理解せられるとすれば言葉自身の明白に示さないことが如何にして理解せられるのであるか。第四は「ある」である。「ある」といふことを問ふ場合にすでに「……であるか」として問ふのは何故であるか。問はるゝ「ある」と問ふ「ある」とは同一であるか、異つてゐるか。異つてゐるとすればどう異つてゐるか。

これらの四つの問ひは、「ある」といふことはどういふことであるか」といふ問ひを形成する言葉自身の含む問題である。我々はこの本來の問ひに達する前にまづこれらの四つの問題を解かなくてはならぬ。がこれらの問題は實は本來の問ひに本質的に屬するものである。だからこれらの問題を順次に考察することによつて、恐らく本來の問ひに對し日本語が與へる解答を探り出し得るであらう。

#### 四

先づ第一の問ひ、——「こと」とは何であるか。「こと」と「もの」とは如何なる差別を持つか。「こと」を問ふことは「もの」を問ふことゝ如何に相違するか。

「こと」の語義には大體三つの方面がある。一は「動くこと」「見ること」といふ如く動詞と結合して或動作を現はし、或は「静かなること」「美しきこと」といふ如く形容詞と結合して或状態を現はすと云ひ慣はされてゐる方面である。二は「變つたこと」が起

つた「何か、ことがあれば」といふ如く或出來事を従つて歴史的事件を現はすと云はれる方面である。更に三は、或ことを云ふ或は考へる「ことといふ如く」云はれ考へられることを現はす方面である。我々はこれらの語義の差別、従つてまたその統一に於て、「ことが何であり、ものと如何に相違するかを探つて見なければならぬ。

一、「ことは動作や状態を現はすと云はれる。しかし果して「こと」といふ言葉自身が動作或は状態を指示してゐるであらうか。「動くこと」といふ場合にそれが動作を現はすのは「動く」といふ言葉が動作を意味するからであつて、「こと」自身は動作にかゝはるところがない。それは「静かなこと」が「静か」といふ語によつて状態を示すのであつて、「こと」とかゝはりがないと同様である。「こと」自身は動作でもなく状態でもなく、たゞそれらの動作や状態がそれとしてあることを示すに過ぎない。こゝにまづ第一に「こと」が「もの」からおのれを區別する。「動くもの」の「動く」といふ時には「動く」といふ動作はたゞそれとしてあることを示されてゐるのではなく、そのものの動作として「もの」をその中味に於て増大するのである。だから「動くもの」は「動く」といふ動作を持つ意味に於て、その動作の「それ」としてあることを示すところの「動くこと」にもとづくこと云はなければならぬ。「動くこと」は「動くもの」の「動くこと」として「動くもの」に屬すると共

に、また「動く」ものを「動く」ものたらしめる「こと」に外ならぬのである。

かくの如く或動作或は状態に於てあるものがこれらの動作或は状態のそれとしてある「こと」にもとづく「こと」すれば、何らかの動作或は状態を拂ひ去つてたゞあるもの「を」考へるとき、それが同様に「ある「こと」」にもとづく「こと」云はなければならぬであらう。「あるもの」に於ては「もの」があり、ものがあるためには「ある「こと」」がすでに豫想されなくてはならぬ。「ある「こと」」は「あるもの」の「ある「こと」」であると共に、またある「もの」を「ある」ものたらしめる「こと」である。かくて一般に「こと」は「もの」に屬すると共に「もの」を「もの」たらしめる基礎であると云ひ得るであらう。

この「もの」と「こと」の關聯は更に詳しい考察を必要とする。元來「もの」とは「物」といふ漢字をあてゝ考へられてゐるやうに、たゞ物理的なるもの物質的なるものをのみ意味するのではない。幻視せられたるもの、空想せられたるものといふ如き全然心理的なるものも、神といふもの人格といふものといふ如き全然非物質なるものも、すべて「もの」である。總じて存在し或は存在せざるいかなるものも「もの」でないものはない。更に我々は「もの」云ふ「もの」思ふ「もの」寂しい「もの」語り「もの」知りといふ如く、云ひ、思ひ、知り、感ずるあらゆる精神活動に「もの」を結合する。しかもこの「もの」が

「こと」とは異なり、「こと」にもとづいて成り立つとは如何なる意味であらうか。「もの」も「こと」として限るのは何であり、また何故にそれが「こと」にもとづかねばならぬのであらうか。この疑問を解決するものは、思ふに、志向性の視點のほかにはないであらう。「ものいふ」「もの思ふ」といふ如き用法に於ては、云はれるもの、思はれるものは不定であつて、云ひ思ふことの内容に何の限定をも與へず、従つて「いふ」「思ふ」といふと意義上何の差別もないものであるが、しかもこゝに「もの」の語の附加さるゝことが要求され、甚だしきに至つては「もの知り」「もの語り」「もの見」などの如く「もの」の語の附加によつて漸く動詞の名詞法が存立するといふのは、明かにこれらの言葉が「……を云ふ」「……を思ふ」「……を知る」「……を語る」「……を見る」と云ふ如き何ものかへの志向を本來含んでゐるが故に外ならぬ。かくの如き志向性がすでに(無自覺ながらも)理解されてゐたと見なければ、「……を云ふ」といふ如き書き方によつて現はされると全然同じ意味を「もの云ふ」といふ云ひ現はしによつて現はし、しかもそれが一般的に使用せられてゐた所以は解し難いものとなるであらう。意志を譯さるゝ Will 相當する言葉を持たない日本語が、「心ざす」といふ語に於て「心が或ものをさす」といふ心の志向的構造を明白に捕へてゐるのも、決して偶然とは云へない。「もの」とはまさ

しく志向せられるもの、心の指すものに外ならぬ。「物」の意味に於ては「見られるもの」「觸れられるもの」「等」であり、心理的なるものゝ意味に於ては「思はれるもの」「考へられるもの」「等」に外ならず、精神的なるものも「愛せらるゝもの」「信せらるゝもの」「等」であつて、すべて「見ること」「思ふこと」「信ずること」などの指すものでないものはない。こゝに於て我々はおのづから「こと」「もの」の構造的聯關を理解し得るであらう。「見ること」「指さすところ」に「見らるゝもの」がある。「見らるゝもの」は「見らるゝこと」或は「見られてあること」に於て成り立つ。かくの如く「見ること」が「もの見」としてすでに「もの」への志向をふくみ、見らるゝものが志向せられたるものとして「見られてあること」に於てすでに主觀的ならざるものとして見出されてゐるとすれば、「こと」は「もの」「の」「こと」であると共に「もの」の見出される地盤でなくてはならぬ。

二、「こと」の語義には更に「出來事」「事件」の意味があり、そこから歴史的な事件の契機としての「仕事」「しわざ」「行ひ」の意味も出てくると考へられる。例へば「こと」がある「こと」が起る、「こと」になるといふのは前者であり、「ことをする」といふのは後者である。しかしこゝでも我々は「こと」が直ちに「事件」「行ひ」そのものであるか否かを反省して見なくてはならぬ。例へば電車と自動車とが衝突したといふ一つの「事件」



に於て、電車や自動車は「もの」であつて「こと」ではない。またこれらのものゝ疾走する「こと」は、既に「動くこと」に就て云つたやうに、疾走そのものゝそれとしてある「こと」を示しはするが、疾走そのものではなく、従つてこの事件の要素ではない。衝突を引起したの「こと」としての疾走ではなく「もの」としての疾走である。同様に衝突も亦「ものゝ衝突」として「もの」を prädicieren する「もの」である。然らばこの「事件」に於て通例事件の内容として考へられることは皆「もの」であつて「こと」ではない。しかも我々は電車と自動車とが衝突した「こと」を認める。この「こと」は右の種々なるもの及びそれらの關係の全體に於て存する一つの「こと」であり、それは「もの」と離して話し又傳へる事も出来る。然らば「こと」は通例の意味の事件に於て存する「こと」ではあるが、事件そのものではない。同様に、人の「行ひ」に於ても、その人が身體を動かさし何ごとかを云ひ何らかの感情意志を表白するといふその動作そのものは見られ感ぜられる「もの」であつて「こと」ではない。「こと」はこれらの動作に屬し、しかもその動作の基礎となる「こと」である。人は「ひどい行ひ」をする、「例へば他の人をなぐる。なぐる」といふ動作そのものは「こと」ではない。それが「ひどい行ひ」であるためにはすでに「ひどいこと」が理解せられてゐなくてはならぬ。だから「ひどい行ひ」をするのが「ひどいこと」をする」と同義に

解せられるのは、かゝる「もの」として動作に屬する「こと」が「行ひ」の本質として理解せられてゐるからに外ならない。然らば通例の意味の「行ひ」そのものが直ちに「こと」ではなく、「行ひ」に於て行はれる「こと」、せられる「こと」、即ち「行ひ」に於てあらはにせられてゐる「こと」が、本來の意味の「こと」である。

「事件」「行ひ」等として解せられる「こと」の意味が右の如くであるとすれば、かゝる「こと」は一の意味の「こと」とは一見したところ明白な相違を持つやうに思はれる。例へば「私が見る」ことになつた、「思ふ」ことをする」といふ如き場合には、この「こと」は「見る」「思ふ」などの作用をそれとしてあることゝして示すのではなく、従つて「私」が「志向作用」としての「見る」こと、「思ふ」ことになり或は「行ふ」といふのではない。私が何ものかを見るといふ「事態」になつたのであり、また「思ふ」といふ作用に「志向せられてゐる」ことを「行ふ」のである。かゝる「こと」は「もの」と如何なる關係に立つであらうか。「見る」ことを嫌ふ、「變つた」ことを見る、「仕事を思ふ」などゝ云はれ得るとすれば、かゝる「こと」は「志向せられたるもの」としては「もの」と同一の性格を持つのであらうか。

先づこゝに出來事の意味の「こと」を捕へて見やう。現在の用法に於ては出來事はほゞ *Geschehnis* に當る意味を持つてゐる。日常生活に於て何らか目立つ事件はすべ

て出來事である。特にそれは「出來心」といふ用法と同じく突發の事件を現はす意味をも強く擔つてゐる。しかし本來の意味に於ては言葉通り「出で來ること」であつて突發と否とを問はない。「學人の錯まり出で來る」、「かくの如きことも出で來る」といふ如き古き用法の示す如く、「出で來る」は生ずる、起るの意味であつて、しかも最もあらはに生起の本質を現はした言葉である。恰も肌に腫物が出來るやうに、「こと」もまた何處よりか出で來る。さうして何處へか過ぎ去つて行く。然らば出來事としての「こと」は時間を本質とすると云ふべきであらう。この意味に於ては「出で來る」のは何人の作爲をも待たず、何人も左右し得ないこととして、自ら生起し經過することである。従つてそれは何人か「すること」は明白に異つてゐるやうに見える。しかもこの「出で來る」はたゞ時間的生起をのみ意味するのではない。我々は最も普通に「私は見る」ことが「出來る」といふ。この句に於て「出で來る」の主格は明かに「見る」ことである。「見る」ことが「出で來る」のである。私は……出で來ると解すればこの句は全然無意味に陥るの外はないであらう。「は」といふ「て」を「は」は單に主格を示すのみならず或ものをそのものとして他より區別し明かに指示する意味を持つ。「私は」といふ時、それは「見る」ことが「出來る」といふ現象の起る場面を指示設定するのである。

然らば右の句は、「私に於て見ることが出で来る〔私に……出来る〕の意味でなくてはならない。しかもそれが、「私が見ることをなし得る、或はなし能ふの意味と同視されるのである。かくの如く「ことが出来る」と「ことをなし得る」とが同義であるところ、前に云つた出来事の時間的意義がその真相に於てあらはにされて來ると云ふことが出来る。といふのは、「ことが出来る」とは或この可能性を意味しつゝ、同時に又その可能なる「ことが何人も左右し得ない生起としての性格を帯びつゝ、我々に出で来ることをも共に意味するからである。たとひ日常の用法に於て、「私は或ことが出来る」と「大變なことが出来る」とが、可能と生起との意味に區別されて用ゐられるとしても、「ことが出来る」がその本來の意味に於て兩者を共に含んでゐることは覆ひ難い。しかしこゝに注意すべきことは、「ことが出来る」場面として「私は或は何人か」が存すると否とによつて、右の可能と生起との分離が起り又は起らざることである。「町に變つたことが出来た」といふ場合と「私には變つたことが出来た」といふ場合との比較がそれを明かに示すであらう。前者に於ては單純にたゞ「こと」の起つたことのみが意味せられるのであるが、後者に於ては「こと」が起つたことのみならず私がそのことをなし得たことも意味し得るのである。従つて「町に變つたことが出

來る」といふ現在形の用法は「私に變つたこと」が出来る」といふ場合ほど通例には用ゐられはしない。何故なら「町」が人々の團體を意味しない限りそれは何ごとかをなし得るものではないからである。かくて「こと」は何人かに於て出で来る場合にのみ何人も左右し得ざる生起でありつゝしかも可能であるところの可能性を意味すると云ふべきであらう。

こゝに我々は出來事としての「こと」と仕事としての「こと」とが密接に連絡するのを見る。前者は「こと」が起るのであり後者は「こと」をするのであるが、しかし「こと」が起るのは「こと」が出来るのであり「こと」が出来るのは何人かに於て初めて充分な意義を發揮し得るとすればそれは「何人か」にするのであるところの「こと」をする」と同一の地盤に存することになる。「善いこと」をする」といふ場合の「こと」は「何人か」にせられること、即ちその人の行ひに於てあらはにされる「こと」を意味するのであるが、それはその人に於て「善いこと」が出来ることに外ならず、「善いこと」が「出で来る」ことは即ち「善いこと」が起ることである。歴史的に起るすべての「こと」は、それが「出で来る」といふ本質に於てある限り、何人か「爲して」得る「或は」得ない」といふ自由の下に關係する「こと」に外ならない。しかしこの「こと」が出来る「地盤」としての人が眼界から失はれたときに「こ

とが出来るといふ言葉の現はす可能性の意味は失はれ、「出来事」はたゞ偶然に、何人の自由とも關係なく、おのづから「出で來たり、起る」として、「ことをする」といふ意味の「こと」とは明白に離れることになる。かゝる意味の「出来事」は「こと」の本來の意義を失つたものとして、本來の「こと」から區別されなくてはならぬ。

かくの如く「こと」は、我々自身に於て出で來ることとして、即ち我々自身に生起する可能的なることとして、その本質を示してゐる。こゝにこの「こと」が一の意義の「こと」と如何に關係するかも知見出され得るであらう。ここでは例へば「ものを見ること」、「見らるゝもの」、「見られてあること」が「こと」であつた。しかしかゝる志向作用や志向性は志向するもの、「心ざすもの」としての我々自身の「かゝはり」、「ふるまひ」に屬することである。我々自身の「かゝはり」、「ふるまひ」がすでに初めよりかゝる志向的構造を持つてゐるのである。だから我々自身の可能的なる「こと」が我々の「かゝはり」、「ふるまひ」となつて現はれるときに、そのかゝはり方ふるまひ方即ち仕方として一の意味の「こと」が存するのである。だから例へば「私が見ること」になつたといふ場合には、私に出来ることとして見るといふことを私のふるまひとして現すやうに定められたのであり、かゝる私の自由な「ふるまひ」、「かゝはり」としての「見ること」は何ものか

を見ること、及びその見られてあるものゝ見られてあることを、すでにその「仕方」として含んでゐるのである。かく見れば一の意味の「こと」は二の意味の「こと」の仕方として後者に於て存立すると云はなくてはならぬ。

では「見る」ことを願ふ、「仕事を思ふ」などの如く、「見る」こと、「仕事」などが「願ふ」「思ふ」などの志向作用の對象とされるのは何故であるか。私の自由な「かゝはり」「ふるまひ」としての「見る」こと、「仕事」が更に志向せられるものとなり得るならば、「かゝる」こととは「もの」とどこに相違があるか。こゝに我々は先づ「こと」が重々相重つてゐるのを見わけねばならぬ。「こと」を願ふこと、「こと」を思ふこと「に於て、願ひ思ふこと」は先づ私の自由な「かゝはり」「ふるまひ」であり、その仕方として「……」を思ふこと、「思はれたるもの」ゝ思はれてあること「があり、更にその「思はれたるもの」としての「こと」がある。この最後の「こと」がこゝに問題となるのであつて、たとひそれが仕事であり行ひに於ける「こと」であつても、願ひ思ふといふ現前の「こと」の構造中に於ては「願はるゝもの」「思はるゝもの」に外ならぬと考へらるゝのである。しかも我々は「こと」を思ふ「こと」を願ふ「こと」といふ表現を明かに「もの」を思ふ「もの」を願ふ「こと」といふ表現から區別する。この區別に根據があるならば、「志向せられるもの」がすべて「もの」ではなく、「もの」

でなくしてしかも志向せられることがあるといふことを許さなくてはならぬ。ではその區別は何にもとづいてゐるであらうか。右にあげた例が示してゐるやうに、我々自身の自由なる「ふるまひ」「かゝはり」である「こと」は、それが更に志向せられる時にも「こと」は呼ばれ得ない。たとひそれがたゞ一つの意味として考へられ云はれる場合でも、それはあくまでも「こと」である。かくして「こと」は我々自身の可能的なる「こと」に根ざすものとして自らを「もの」から區別する。

しかしながら、「こと」の地盤としての我々自身がまた「もの」(者)である。即ち我々は「見るもの」「であり」「思ふもの」「であり」「行ふもの」である。かゝる「もの」は勿論見られるもの、感せられるもの、といふ如く志向せられたものではない。従つて見られる肉體や認識される心理作用としての人間ではない。かゝる意味の我々、或は人間は第一次に「もの」として「こと」に於て見出されるものである。こゝに到達した「もの」は「こと」に於て見出さるゝのではなく、あらゆる「こと」がそれに於てあるものであつて、一に於て區別せられた「もの」は根本的に異なる。かゝる特殊なる「もの」の構造を理解することによつて「こと」は初めてその真相に於て理解され、また如何にしてかゝる「こと」の理解が可能であるかも明かにせらるゝであらう。がこゝでは先づたゞ、「もの」——「こと」



——「もの」の相違と關係を指示するに留める。

三、「こと」は更に「言」を意味する。「難しいこと」を云ふ「こと」云ふ如く、それは「云はれること」である。かゝる「言葉」としての「こと」は右に考察した「こと」の意義と如何に關係するか。「云ふ」はすでに云つたやうに「……」を云ふ「こと」であり「もの」云ふ「こと」であつて、そこには「云ふこと」「こと」云はれるもの、「こと」云はれるもの、「云はれてあること」「こと」が認められる筈である。しかも我々は「難しいこと」を云ふ「こと」は云つても「難しいもの」を云ふ「こと」は云はない。「難しいもの」云ひ、「或は難しいもの」云ひ「方」は必ずしも「難しいこと」を云ふ「こと」ではなく、極めて平易な「こと」をも「こと」も「こと」は極めて「難しいもの」云ひによつて云ふ。然らば「云はれるもの」ではなくして「こと」であらう。「云ふこと」といふ云ひ現はしがすでに「云ふ」といふ「こと」の他に「云はれること」を意味してゐる。「お前の云ふこと」は解らぬ「こと」いふ場合には、お前のふるまひとしての「云ふこと」が解らないのではなく、お前によつて「云はれること」が解らないのである。かくの如く「もの」云ふ「こと」云ふ云ひ現はしによつて現はされた「云ふ」の志向性が實は「もの」を志向せずして「こと」を指向してゐるとすれば、「こと」は「言葉」といふ「もの」ではなくして、「言葉」といふ「もの」によつて現はされる「こと」でなくてはならぬ。このことは次の例によつて明かに示されるであらう。

「私はいやだ」、「そんなことを云ふな」、「といふ問答に於て、「そんなこと」とはそこに使はれた言葉を指してゐるのではない。「いやだ」といふ言葉を「氣がすゝまぬ」「私は斷はる」といふ如き言葉に置きかへても、「そんなこと」として指してゐる「こと」は變らない。この場合の「こと」は右の如き言葉のいづれによつても表現され得る「私の否定的な態度」即ち「私のふるまひ」である。私は「いやだ」と云ふ「こと」によつて（即ちいやだといふ言葉）を云ふふるまひによつて、何かを否定するといふふるまひを表現するのである。「云ふこと」はこの二重のふるまひを意味してゐる。

かく見れば「言」の意味に於ける「こと」もまた前に云つた「こと」と異つたものではない。日常の會話に於て「あの男はいふことゝすることゝが合つてゐない」といふことを非難の意味に於て語るのは、すでに「いふことゝすることゝが「こと」として本來一であるべきこと」或は一であり得ることを理解してゐるのである。我々は「曾てしたことを再びする」、「或は「曾てしたことを人に云ふ」、「更にまた「常に云ふことを自らする」、「或は「常に云ふことを彼にも云ふ」、「即ち同一の「こと」はすることゝもいふことゝも出来るのである。こゝに本質的に區別さるべき何ものもない。

しかも我々は「言」としての「こと」が「事」として「こと」と全然區別され得ないとは云ふこ

とが出来ぬ。「言」「事」と云ふ如き漢語をあてはめて區別することが——例へばすでに古代に於て「ふること」が「舊辭ふること」も「古事ふること」も書きしるされた如く——そのことがすでにこゝに區別の認められてゐることを明示する。それでは「言」の特性はどこにあるか。それは「言」が人々の間に話され、聞かれ、理解されるといふところにある。人はその「したこと」を人に話すことは出来る。然し話すのは「したこと」自身ではなくして「言」に於てあらはにされた「したこと」である。かくの如く「こと」が「言」に於てあらはにされ、従つて人々の間に分ち合はれるといふところに「言」の特性が認められねばならぬ。このことはすでに「こと」の語義に、「ことごとしく」といふ如くあらはに目立つといふ意味、或は「こと殊、異」といふ如く他と異つて目立つといふ意味が存することゝも何らかの關聯を持つであらう。しかしながら「言」のこの特性は、それが本來「こと」の性格として存するのでないならば、「言」と「事」とが本質的には同一であるとの前言を覆へすことになる。「こと」が本來「あらはにする」といふ性格を持ち、それが「言」として現はれるのであるとき、初めて「言」が本來の「こと」でありつゝしかもそれ自身の特性を持つ所以が理解されるのである。

「こと」は我々のふるまひであり態度である。しかもそれは「言」に於て示される様に、

「あらはにする」といふ性格を持つ。然らば我々自身のふるまひはそれ自身既に「あらはにする」、「何ものかを見出す」といふ性格を持つのである。かゝるふるまひの構造としての志向性に於て、即ち「こと」に於て、「もの」がすでに見出されてゐるのは、「こと」がかゝるあらはにする性格を持つことに外ならない。こゝに於て我々は我々自身のふるまひにすでに「あらはにする」性格の存すること、或はそれ自らの即ち「こと」の理解の存することを認めなければならぬ。「こと」はこの理解性の分枝として、即ち「わけ」「わかり」として、「言ことば」となつて現はれる。かく見れば「こと」がまた「言ことば」でもあるといふことは、「もの」——「こと」——「もの」の關係に於て、「云ふもの」として我々自身である「もの」が、それ自身の構造に於て「こと」の理解を持つこと、従つて「こと」は、あらゆる「こと」の地盤としての「もの」(者)の自己理解性にもとづくといふことを示すと云へよう。

「こと」の三つの語義は以上の如く「もの」と「こと」の差別を示し、更に「こと」の地盤としての特殊なる「もの」(者)を指示する。こゝに我々はほゞ第一の間に答へ得たかと思ふ。「こと」と「もの」の差別は第一次には志向せられたるものと志向性との間の差別であり、第二次にはこの志向性とその地盤たるものとの差別である。前者に於ては「こと」が「もの」の基礎にあり、後者に於ては更にこの「こと」が「一層基礎的な層に於て」も

の「にもとづく。かゝる差別を眼中に置けば、「あるといふこと」を問ふのは「有るもの」の基礎を問ふのであると共にそれ自身必然的におのれを基礎づけるものへの問いに入り込まねばならぬ。この點に於て「もの」を問ふとは根本的に異なる。一切の物理的なるもの、心理的なるもの、歴史的なるもの、社會的なるものへの問いは、そのものを基礎づける「こと」を顧慮することなく、たゞ「もの」と「もの」を區別しその間の關係を探り、「もの」を「もの」として明かに定めればよい。然るに「こと」を問ふ場合には人はまづこの「こと」を取り出さねばならぬ。「こと」はそれ自身あるものではなくして、たゞ有るものに屬せることである。だから有るものから「こと」をわけ、「もの」の境内から原理的に出離してこの「こと」の中に入り込まねばならぬ。かゝる「こと」は「もの」をあらしめる基礎として「もの」よりも先である、即ちアプリアオリである。しかしながらかゝる「こと」は、たゞものへのかゝるはりの根本に存する「こと」の理解に於てのみ我々に與へられる。この「こと」の理解はそれ自身「人といふもの」の有り方に於て現はれる。こゝに於て「こと」を問ふことは、「もの」への問いが眞實には問ふことをしないこの特殊なるものゝ構造を明かにしなければならなくなるのである。(未完)

二月號「日本語に於ける存在の理解」正誤

一六七頁初めの「甚だしく單純化し、從」の九字を一六五頁初めに移し、一六七頁十行目と十一行目を直ちにつゞける。